

秋田県衛生科学研究所報

第 1 0 輯

昭和 40 年 度

REPORT
OF THE
AKITA PREF. INSTITUTE OF PUBLIC HEALTH
(10)



No.10

秋田県衛生科学研究所

秋田市千秋明德町1-40

SENSYUMEITOKU-MACHI. 1-40.

AKITA-SHI, AKITA PREF., JAPAN

1 9 6 6

巻 頭 の 辞

所 長 児 玉 栄 一 郎

一昨年5月には現在の研究所が新築落成と同時に移転を終えた。夢がそのまま実現したようで実に嬉しかったものである。その年の4月改められた機構によって研究部門は6科となったが、この頃は衛研職員も初期の不安を克服して正常な軌道に乗り、地味な道を歩んでいる。また「秋田県衛生科学研究所報」も回を重ねること10回、この度第10輯が編まれた。これは大いに祝福されなければならないことと思う。

業務について言えば、細菌病理科には待望のウイルス室が完成し、検査も他県並みにできるようになった。県内ボツリヌス菌分布の調査には8カ年を要したが、アメリカでは何倍と広い地域を E. F. Foster 教授らは1, 2年で片付けてしまった。考えさせられることである。理化学検査科では放射能検査の技術が向上し、放射性 Sr や Cs のみならず、やがて死の灰の経時的分析も可能となろう。最近また食品添加物、農薬、麻薬の微量分析も可能となった。人力の面を機械に代行させようと思うが、それには何年かがかかろうし、或いはそのうちそんな機械は不要になるかも知れない。食品栄養科では長年の宿望であった山菜、救荒野草の分析が行なわれており、美味な山菜料理、経済的で栄養価の明確な調理ができようとしている。分析表の完成も間近い。成人病科では高血圧症の検診に WHO の診断基準が採用せられそれによってより正確な数値が掲められるようになったと同時に、更に前進して脳卒中（脳出血、脳硬塞、くも膜下出血症その他）、動脈硬化症の成因をきわむべく発展しつつある。本態性という言葉は一応便利ではあるが、しかしこれほど不鮮明な言葉はない。成因についてはすでに "Mosaic theory" を樹てた学者もいるが、更に検討を要すべきであると思われる。

母子衛生科ではすでに統計学的検討の段階を越えて実際の指導と研究に移り、また身体的な生育ばかりではなく、3才児を目標に精神の発達と環境との関連に手を染めようとしているが、この企画は全国の注目を浴びているようである。環境衛生科は全く間口が広く、家人が自分の家屋内でまごついている現状である。住みよい環境造り、不幸な子供を生まない運動などは美しい言葉だけでは出来そうもない。人命尊重という文句の蔭には毎日交通事故が頻発している。やはり人の真心が必要であろうと思われる。私慾はなかなか捨て難いものようであるが、しかし世の中に対する Public Service のできないことはないだろうと思うし、また現に私慾を捨て世の中へ奉仕したため、すばらしい大学が授けられた人が現実にいることも記しておく。